

5. 大学院・看護学研究科

5.1 理念・目標

5.1.1 博士前期課程（修士）

5.1.1.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.1.2 教育目標

1. 看護教育を支える教育・研究職の育成

本課程では、学部で蓄積された看護学に関する成果を、さらに深化・発展させることによって時代と地域の要請に応えるため、看護学分野における学術上の先端的役割を担うとともに、知識の体系化と看護技術の開発を積極的に推進し、看護学の学問体系の構築に貢献する教育・研究職の人材を育成する。

2. 高度な専門的知識・技術・実践能力を備えた看護職者の育成

実践現場において当面する種々の問題について、体系的、継続的に研究を行い、合理的に問題解決できる人材や、看護職に対する指導・相談、関係する職種間の総合的調整能力、ケアの環境条件を積極的に改革していく役割を担う人材の養成が求められている。そうした要請に応えるため、専門看護師（CNS:Certified Nurse Specialist）の養成を図り、もって地域の看護の発展に一層寄与する高度専門職業人を育成する。

3. 女性の一生を通じた性と生殖に関わる健康を推進できる助産師の育成

時代の流れや社会情勢に高い関心と洞察力を持ち、多様化する女性の生き方や家族のニーズ、専門化・複雑化する助産に対応できる人材や、保健・医療・福祉に携わる多職種と積極的に連携・協働し、継続的に援助を推進できる人材の養成が求められている。そうした要請に応える助産師の養成を図るとともに、助産学の発展に寄与する専門職業人を育成する。

4. 生涯にわたって研鑽できる看護職の知的交流の場づくり

日々進歩・発展する医療技術と看護環境の変化に機敏に対応し、看護の知識と技術の向上を図るため、看護の実践現場と教育・研究の場の交流を活発にし、地域が要望する質の高い看護サービスの提供を図っていく。そのためには、学部の社会人入学に加えて、卒業後の継続教育、社会人の再教育の場を提供する必要がある。本課程は、このような向上心旺盛な学部卒業生や社会人の受け皿としての機能を持ち、看護現場のより一層の質の向上のために寄与することを目指す。

5.1.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

本学の看護学研究科では、入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 幅広い基礎学力を有し、かつ希望する専攻分野の基礎知識を有する人
2. 人間や社会に対して広く興味を持ち、豊かな人間性と高い倫理観を有する人
3. 看護学を通じて地域社会及び国際社会に貢献する意志を有する人
4. 専門看護師コース志望者は、対応する分野の実務経験を有し、専門看護師の資格取得を志す人
5. 助産実践コース志願者は、助産師の免許取得を志す人

5.1.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士前期課程では、より卓越した看護実践能力と高い研究能力を有し、看護学の研究や教育、看護実践・管理に携わることのできる研究者・教育者・高度看護実践者を育成する。研究コースに加え、専門看護師コースと助産実践コースを設け、次のような教育課程を編成している。

1. 広い視野で看護を学ぶための学際的な科目から構成されている「共通科目A」、科学的根拠に基づいた高度な看護実践能力を育成するための「共通科目B」、各研究教育分野におけるより深い専門性を学ぶ「看護専門科目」を置いている。
2. 国際的な視野を持ち、より効果的な看護を探究し提供していくために、海外の招聘教員による国際看護を学ぶ科目を置いている。
3. 論文作成にあたっては、研究計画の中間報告や複数教員による、組織的で計画的な研究指導体制をとっている。
4. 専門看護師コースでは、特定分野におけるケアとキュアを融合した看護実践力、保健医療福祉チーム内の調整力などの育成をめざし、看護実践力の高い専門看護師とタイアップして日本看護系大学協議会で認定された専門看護師教育を展開している。
5. 助産実践コースでは、助産師免許取得に必要な科目のみならず、多職種と連携してハイリスクに対応でき、多様な年代の性と生殖に関わる健康課題に応えられる専門的知識・技術や倫理的態度を育成する科目を置いている。

5.1.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、次のような研究能力や看護実践能力を有する者に修士（看護学）の学位を授与する。

1. 看護学に寄与する修士論文の作成を通して、学際的で深い科学的知識を基にした体系的な研究方法を修得している。
2. 専門看護師コースでは、1に加えて特定の看護分野における高度な知識と技術を修得している。さらに、総合的な判断力をもって組織的に問題解決をはかる能力を身につけている。
3. 助産実践コースでは、1に加えて専門化・複雑化する助産分野に対応できる助産実践能力と助産管理の基盤となる能力を修得している。さらに、女性のライフサイクル全般の性と生殖に関わる健康課題に応える能力を身につけている。

5.1.2 博士後期課程（博士）

5.1.2.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.2.2 教育目標

1. 看護学や看護実践の発展に寄与する教育者・研究者の育成

看護・保健・医療・福祉を取り巻く環境の変化や地域の要請に対応することができる高度で専門的な知識・技術と、総合的判断力、リーダーシップを備えた看護職を養成する。また、これまで蓄積された経験知や実践知に基づいてより効果的な看護ケアプログラムを開発していくとともに、健康に関する人々の反応や看護援助にまつわる専門的知識を系統的に理解し、諸科学の知見と関わらせながら看護学をさらに体系化し、かつ現代社会の変化や趨勢に照らして看護が果たすべき役割を發展的、科学的、体系的かつ原理的に探求していくことができる教育者・研究者を育成する。

2. 科学的な理解に基づいて看護をデザインできる研究者の育成

地域社会並びにそこで生活するあらゆる健康レベルの人々やその家族に対して総合的なヘルスケアをデザインするために、高度な理論・方法など学際的な知識体系を修得・活用して新しい看護実践方法、環境、用具等の開発を行なう。さらに、それらの実践の場における有用性の検証を図り、実践に活かせるエビデンスを明らかにできる研究者を育成する。

3. 対象の特性を踏まえた看護を実践できる研究者の育成

効果的な看護ケアプログラムの開発、あるいは対象者個々の個別性を踏まえ、その人たちが帰属する地域の文化的特性を踏まえた看護援助の開発、エビデンスに基づいた看護援助法の確立をめざした高度の研究を継続的に推進していくことのできる研究者を育成する。

5.1.2.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 実務経験を有し、看護学への探求心を有する人
2. 看護学研究に対する高い動機と学びに必要な基礎的研究能力を身に付け、自立して学修する姿勢を有する人
3. 看護学や看護実践の発展に寄与する意志を有する人
4. 看護学を通じて地域社会及び国際社会に貢献する意志を有する人

5.1.2.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士後期課程では、看護学や看護実践の発展に寄与する研究者・教育者を育成するために、教育課程においては次のような点を重視している。

1. 広い視野で看護学の学的基盤を見据え、看護実践のもととなる原理を解明する能力や人々の健康ニーズに役立てる能力を身につけるために、研究計画の中間報告や複数教員による組織的、かつ計画的な研究指導体制をとっている。
2. 学位論文の審査にあたっては、他の大学院等の教員を審査委員に加える等、論文の質の向上と客観性の確保に努める。

5.1.2.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、看護学や看護実践の発展に向け、学位論文において新しい知見を産出し、自立した研究活動に必要な能力を有する者に博士（看護学）の学位を授与する。

5.2 大学院生の入学・在学・修了の状況

1. 入学の状況

1) 入学定員・収容定員

課 程	単位 (人)	
	入学定員	収容定員
博士前期課程	15	30
博士後期課程	3	9

2) 試験実施日

	実施日
博士前期課程入学試験 (学内選抜)	令和 4年 7月 2日 (土)
博士前期課程入学試験	令和 4年 9月17日 (土)
博士前期課程入学試験 (第2次募集)	令和 5年 1月28日 (土)
博士後期課程入学試験	令和 4年 9月17日 (土)
博士後期課程入学試験 (第2次募集)	令和 5年 1月28日 (土)

3) 受験状況等

	単位 (人、倍)					
	募集定員	志願者数	受験者数	合格者数	実質倍率 C/D	入学者数
博士前期課程	10	6	6	6	1.0	5(4)
博士前期課程 (2次)	若干名	4	3	3	1.0	3(2)
博士前期課程助産	5	5	3	3	1.0	3(3)
博士前期課程助産 (2次)	若干名	1	1	1	1.0	1(1)
博士後期課程	3	1	1	1	1.0	1(1)
博士後期課程 (2次)	若干名	6	6	5	1.2	5(5)

() の数字は内数であり女性の数を示す
博士前期課程には学内選抜を含む

2. 在学の状況 (令和5年3月1日現在)

課 程	単位 (人)			
	1年次	2年次	計	
博士前期課程	9(9)	18(14)	27(23)	

課 程	1年次	2年次	3年次	計
	博士後期課程	1(1)	4(4)	12(11)

() の数字は内数であり女性の数を示す

3. 修了の状況

1) 修了者数と修了後の進路状況（令和5年3月31日現在）

単位（人）

課 程	修了者数	修了後の進路
博士前期課程第18期生	15(14)	医療機関、教育機関
博士後期課程第15期生	5(5)	教育機関

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

2) 修了後の進路状況（令和5年3月31日現在）

(1) 博士前期課程（第18期生）

単位（人）

区 分	県内	県外	合計
	人数	人数	人数
就 職 医 療 機 関	6	4	10(9)
研 究 機 関	0	0	0(0)
教 育 機 関	2	1	3(3)
保 健・福 祉 機 関	1	0	1(1)
合 計	9	5	14(13)

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

単位（人）

区 分	県内	県外	合計
	人数	人数	人数
進 学 大学院博士後期課程	0	0	0(0)
そ の 他 ・ 未 定	1	0	1(1)
合 計	1	0	1(1)

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 博士後期課程（第15期生）

単位（人）

区 分	県内	県外	合計
	人数	人数	人数
就 職 医 療 機 関	0	0	0(0)
研 究 機 関	0	0	0(0)
教 育 機 関	2	3	5(5)
保 健・福 祉 機 関	0	0	0(0)
未 定	0	0	0(0)
合 計	2	3	5(5)

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

5.3 大学院教務学生委員会

委員長：小林 宏光 教授

委員：石川教授、亀田教授、美濃教授、中道准教授

事務局：河端教務学生課長、林専門員

活動内容：

<前年度までの課題>

大学院の教育研究環境の一層の充実をはかり、また修士。博士論文の質的な向上も目指す。

<今年度の目標・年度計画>

大学院教育に係る業務を滞りなく執り行う。また大学院の教育研究環境の一層の充実をはかり、また学生の年限内での修了を促進するために必要な処置を検討する。

<今年度の活動実績・評価>

年度当初の新入生ならびに在学生へのガイダンスの実施、中間発表会の実施、論文発表会の実施、大学院教育懇談会の実施、修了生のアンケート調査の実施など、例年通り大学院教育に係る業務を担当した。

今年度は大学院教育体制の大幅な見直しを進めた。変更点の1つは大学院研究指導教員の拡充である。大学院研究指導教員資格の基準の見直しを行い、特に後期課程において研究指導できる教員の数を大幅に拡充した。もう一つの変更点は博士の学位審査プロセスおよび学位申請要件の変更である。来年度から博士の学位申請は年間を通じて随時申請できるようになり、また年限内の学位取得を促進するため来年度入学生から学位申請時に求められる要件を変更した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

次年度以降、特に博士後期課程においてはこれまでと大きく異なる手順で学位審査が行われることになるため、これを滞りなく運営し、問題点があれば改善していくことが来年度の課題である。

5.4 令和4年度 修士論文題目一覧

分野	氏名	修士論文題目	指導教授
看護管理学	小西千恵子	新人看護師の入職後1年間におけるコミュニケーション能力の変化と影響要因	石川 倫子
看護管理学	大岩 麻紀	女性看護師が末子の就学後もキャリアを継続するための課題と調整行動	石川 倫子
看護管理学	中川 智絵	看護師長が所属部署の課題達成に向けて看護師と協働するための行動	石川 倫子
女性看護学	西 真理子	病産院の助産師が行う2週間健診を中心とした産後健診における母親へのメンタルヘルスケアの実践	米田 昌代
子どもと家族の看護学	松本 郁海	事業所におけるAYA世代がんサバイバーの就職に対する対応の実態と対応に影響する考え方	小林 宏光
成人看護学	池上 暁	便秘のある進行がん患者をケアする訪問看護師の困難感の経験	牧野 智恵
成人看護学	天日 更織	新型コロナウイルス感染拡大により面会制限を受けた終末期がん患者の家族の経験	牧野 智恵
老年看護学	須田さや香	手術を受ける認知症を有する高齢患者に対する手術看護認定看護師の臨床判断	川島 和代
老年看護学	宮本菜々恵	認知機能低下を認めた高齢者と家族がもの忘れ外来受診に至ったプロセス	川島 和代
在宅看護学	牛村 春奈	Parkinson病の口腔機能と栄養 ー舌圧と咀嚼能率は栄養摂取量と関連するー	桜井志保美
助産看護学	岡田 岬	COVID-19流行下における妊婦の不安やストレスに対する対処経験と求める支援	米田 昌代
助産看護学	村上 あゆ	夫婦で育児をしていくために開業助産師が行う支援 ～コペアレンティングに着目して～	米田 昌代
助産看護学	中村知奈実	未就学児を持つ父親の在宅型テレワーク下における育児状況と育児ストレス	亀田 幸枝
助産看護学	登美 礼子	性成熟期の男女別にみた妊孕性知識と関連要因	亀田 幸枝

5.5 令和4年度 学位論文題目一覧

氏 名	学 位 論 文 題 目	指導教授
阿川 啓子	乳幼児期の先天性心疾患児を持つ母親の育児に関する自律へのプロセスー訪問看護に着目してー	塚田 久恵
木村 一絵	地域保健におけるChild-Adult Relationship Enhancement (CARE) プログラム実施の効果ーランダム化比較試験ー	米澤 洋美
石井 和美	臨床での皮膚清拭のケア技術に関する実験的研究 ー綿タオルと不織布タオルによる拭き取り効果および清拭圧の比較ー	小林 宏光
片桐 覚子	日本人妊婦のQuality of Life 尺度の開発	濱 耕子
瀧澤 理穂	子どもに自己の病名を伝えることに悩む乳がん患者への看護支援	牧野 智恵